問題番号　ＡＤＡ

時間５０分　　１００点満点

第１回　一般入試問題

国　語

受験上の注意

1．試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
2．実施時間は５０分で、１００点満点です。時間配分に注意して解答してください。
3．解答は解答用紙にていねいに記入してください。
4．解答用紙・問題用紙両方に、受験番号、座席番号、名前を記入してください。座席番号は、机に貼ってある番号のことです。
5．試験中は携帯電話の電源を必ず切ってください。
6．私語や物の貸し借りなどは認めていません。困ったことがある場合は、手をあげて先生に相談しその指示に従ってください。

受験番号 ＿＿＿＿＿＿＿＿　座席番号 ＿＿＿＿＿＿＿＿

名　　前 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

聖学院中学校

一　次の各問に答えなさい。

問一　――部分の漢字の読みを答えなさい。

（1）信じた部下に背かれる。
（2）見舞いに来てくれるとは律儀な人だ。
（3）深紅の優勝旗をかざる。
（4）頑丈（がんじょう）な鋼の板。
（5）名画を模写する。
（6）美しい絹のスカーフを贈（おく）る。
（7）材料を厳選する。
（8）毎日花を供える。
（9）著しい進歩をとげる。
（10）異口同音に彼のことをほめる。

問二　――部分のカタカナを漢字にしなさい。

（1）音楽会でシキをとった。
（2）カンイな方法を考えついた。
（3）数学の授業はギモン点が多い。
（4）父は一時間かけてツウキンする。
（5）カントウのグラビアが人気の雑誌。
（6）土地をカクチョウして家を建てる。
（7）領土ブンカツ問題でもめている。
（8）建物のコッカクが見えてきた。
（9）大学のケイザイ学部を受験する。
（10）彼は親コウコウな少年だ。

二 次の文章を読み、後の問に答えなさい。（　、　や　。　や「　」も一字とします）

小学五年生の加納圭太は、弟の加納広太を誘い、昔通った「バスの図書館」へ行ってみた。管理人のおじさんが亡くなって以来使われずにいた「バスの図書館」は、かつての面影を失い、荒れ果てていた。こっそりとバスに忍び込み、「秘密基地」にした二人だったが、ある日、家出中の中学生富士田順平があらわれ、バスに住み着くようになる。

夏休みが終わりに近づいたある日、順平が熱を出しました。

「風邪、ひいたんだと思う。」

ごほごほと、せきをしながら、順平が言いました。

圭太たちは、家から風邪薬を持ってきたり、氷を買いに行ったり、頭にのせた冷やしたタオルを何度も何度もとりかえたり、汗だくのシャツを着替えさせたり、うちわでかわりばんこにあおいだりと、一日中看病しましたが、夕方になっても、順平の熱は下がりませんでした。

バスの中は、夕焼けで真っ赤です。

順平のほっぺも赤く染まっています。くたんとしたからだから、湯気がのぼるくらい、順平は熱くなっています。

「気にしないで帰りなよ。もう夕方だろ。」

熱でふうふう言いながら、順平は、圭太たちの心配をします。

そう言われても、くるしんでいる順平をひとりを置いて、帰るわけにはいきません。

これから夜になるのです。夜の間に悪くなったら、どうするつもりなのでしょう。

圭太は、蚊取り線香をたきながら、悩んでいました。かといって、圭太たちがバスに泊まるというわけにはいきません。

一日、なにも食べられなかった順平は、ひどく弱っているように見えます。

広太の必殺逆立ちでも、いい考えは浮かびませんでした。

順平が、けほっけほっと、せきこみます。

「どうしよう。」

（　あ　）と、圭太が言いました。

「これじゃあ、帰れないよう。」

広太が、泣きそうな声で言いました。

順平のせきは、せまいバスで、よく響きます。喉をふりしぼるようなせきは、聞いているだけで苦しくなるほどです。

やはり、順平をひとりぼっちにするわけにはいきません。

しかし、猫だと言っていたてまえ、連れて帰るわけにもいかないではないですか。順平は、中学生なのです。それも、家出した中学生なのです。

「ぼくが、残って看病するよ。」

と、圭太が言いました。もうそれしかないと思ったのです。

「だから、広太は帰って、なんとかお母さんをごまかしてくれ。」

「いやだ。」

けれども広太は、（　い　）、それを聞きいれようとはしませんでした。
「ぼくだけが帰るなんて、ぜったい、いやだ。」
「どっちか帰らないと、お母さんが心配する。」
圭太は、懸命に弟を説得しました。
「なら、ぼくがいる。ぼくが、看病する。」
広太は、譲りませんでした。
「わかんないやつだなあ。おまえなんか残ったって、役に立たないんだよ。」
圭太がそう言うと、①広太は、目をぎらぎらさせて、
「たつ。」
と、ひとこといい、新しい水をくみに、公園に走っていってしまいました。
圭太は、どうしていいかわからなくなりました。広太は家に帰りそうにないし、順平の熱は下がらないし、時間はたっていくし。
やがて、すっかり陽が落ちてしまいました。
セミの声にまじって、虫の音が聞こえてきます。秋が、近づいてきているのです。
圭太と広太は、無言で、暗いバスの、折りたたみ椅子にすわっていました。
順平の寝息が、すうすうと聞こえてきます。せきが、止まったようです。
風が、少しだけ涼しくなったように感じます。
「どうしよう。」

ぽつんと、広太の声がしました。暗くて、おたがいの顔がよく見えません。背中をまるめてすわっている広太の影が、ぼうっと圭太の目にうつります。
「にいちゃん、どうしよう。」
ふたたび、広太が言いました。心細くてたまらないのです。圭太も広太も、看病されたことはあっても、看病したことはありませんでした。
夜中にうんと悪くなったら、どうしたらいいのでしょう。実際、圭太も広太も、夜中に症状が悪化して、あわてて病院に連れられていったことがあります。順平が、もしそんなことになったら、どうしたらいいのでしょう。
②バスの中は、順平の風邪の匂いがしていました。
だれかが病気になると、こういう匂いがするんだと、圭太は思いました。
じっとりと、圭太のからだからも、汗がふきだします。
夜になってもまだ、バスは暑いのです。夕日が、バスの鉄板をじゅうぶんに熱して、沈んでいきました。熱くなった鉄板がいつまでたってもバスの温度を下げてはくれないのです。
順平を、もっと涼しいところへ連れていったほうがよいような気がします。それとも、もう少ししたら、バスは涼しくなるのでしょうか。外の風は、少しずつ、少しずつ、涼しくなっています。
とはいえ、こうして寝かしておくだけで、順平の熱は下がってくれるのでしょうか。
圭太は、ふーっと息をはいて、ひたいの汗をぬぐいました。
「にいちゃん。」

真っ暗ななかで、広太が言いました。

「にいちゃん、なんか、ちょっと、こわい。」

広太の声は、深刻でした。その気持ちが、圭太にはよくわかります。

圭太は、もう、だめだと思いました。どうしたらいいのか、ほんとにわからなくなってしまった。

（ぼくたち、なんにもできないよう。順平さんをたすけられないよう。）

それでも圭太は、勇気をふりしぼって、バスにいました。逃げだしてはいけない。そればかり思っていたのです。

「にいちゃん、電気、いいだろ。」

広太が、ぽつんと言いました。バスの電気は、見つかるといけないから、つけてはいけない決まりにしてありました。それは、順平と三人で決めたことです。でも、真っ暗な中にいることが、こんなにさびしくてこわいことだと、圭太たちは知りませんでした。

順平は、こんな暗いバスで、毎夜眠っていたのです。

ぱちん、と広太が、電気をつけました。

明るくなっても、圭太の心は晴れませんでした。それどころか、いっそう（う）なっていきます。

夜がふけていくばかりだからです。

かたん。

バスの外で、音がしました。

はっ、と二人は、顔をあげました。

ぎいっ。

だれかが、バスの扉を押しています。圭太と広太は動きません。動けないのです。どきどきと心臓の音が聞こえるほど、二人は緊張していました。

ちらりと、人影が、ガラスにうつりました。それから、その影が、バスの中をのぞきこみます。

「おばあさん！」

お屋敷のおばあさんが、ガーゼの浴衣を着て、うちわを持ち、入り口に立っていました。

おばあさんは、不思議そうに圭太たちを見つめています。それから、ゆっくりバスを眺めると、

「おやおや」

とつぶやきました。だるそうに、首をかしげています。

③叱られるものと思って、からだをかたくしているのに、おばあさんは、いっこうにそんなそぶりを見せませんでした。

（そういえば、おばあさん、病気って言ってたな。やる気がなくなる病気って。それで叱る気にならないのかな。）

おばあさんは、ぼんやりとそこいらを眺め、もう一度、圭太たちを見つめました。

「夢かと思いましたよ。」

おばあさんが小さい声で言いました。ほつれた髪をなおしながら、もぐもぐとなにかつぶやいています。

「ゆめ？　ゆめって？　」

広太が、圭太にたずねました。圭太は、わからないと首を横に振りました。

「いつだかの晩にも、バスに電気がついていました。」

おばあさんが、ひとりごとのように言いました。

順平だなと、圭太は思いました。順平が決まりを破ったのです。でも、腹は立ちませんでした。（　え　）ことだと、圭太は、いま知ったばかりです。

「バスに電気がついている……。そんな夢を見たのかと思っていたら、今晩もついているでしょう。それで、確かめに来ましたよ。」

おばあさんは、ぱたぱたっとうちわをあおいで、ほうっと息をつぎました。そうして、かすかに微笑(ほほえ)みました。

「夢では、ありませんでしたねえ。」

そういって、静かにバスを見まわします。

（大島真寿美『ぼくらのバス』）

問一　（　あ　）（　い　）に入ることばとしてもっともふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

（　あ　）　ア、おろおろ　　イ、いらいら　　ウ、むかむか　　エ、たんたん

（　い　）　ア、でんとして　イ、どんとして　ウ、ばんとして　エ、がんとして

問二　――①について、このときの広太の気持ちとしてもっともふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア、順平の体調が心配だし、お兄ちゃんばかりに看病させては申し訳ない。

イ、自分も順平の看病をできるのに、自分だけ子ども扱いされるのは嫌(いや)だ。

ウ、日が暮れてきて暗くなってきたから自分一人で夜道を歩くのは怖(こわ)い。

エ、おかあさんをごまかすのは難しいから一人だけでは帰りたくない。

問三　圭太と広太が順平を懸命(けんめい)に看病していることがわかる一文を見つけ、最初の五字を答えなさい。

問四　（　う　）に入ることばを文中から三字でぬき出しなさい。

問五　――②について、「順平の風邪のにおい」としてふさわしくないものを選びなさい。

ア、汗だくのシャツのにおい　　ウ、バスの鉄板がさびたにおい

イ、順平の体のにおい　　エ、順平のはく息のにおい

問六　（　え　）には圭太のどのような気持ちを表したことばが入ればいいでしょうか。文中から三十字以内でみつけ、最初の五字を答えなさい。

問七　この文章をつぎのようにまとめました。（　1　）（　2　）に入る体の部分の名称を漢字一字で答えなさい。

いろいろと（　1　）を尽くして看病したが、順平の体調は回復せず、圭太と広太は（　2　）を抱えていた。順平を助ける方法は見つからないうえに、だんだんと日が暮れていき、不安だけが募っていく。もうどうしようもないと途方に暮れていた時に、突然バスのドアが開き、腰をぬかしかけたが、入ってきたのはバスの持ち主のおばあさんだった。

問八　――③について、このときの圭太の気持ちとしてもっともふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア、良かった。おばあさんなら順平を助けてくれるはずだ。
イ、助かった。お化けかもしれないと思ってドキドキしたよ。
ウ、大丈夫かな。おばあさん、あまり具合が良くないみたいだけど。
エ、なぜだろう。バスを勝手に使っていたのに怒られないぞ。

問九　この文章では「圭太」はどのような少年としてえがかれていますか。もっともふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア、どんな事態に直面しても解決策を見つけることができる少年。
イ、いつでも他人のことを優先して自分のことを二の次に考える優しい少年。
ウ、解決が困難な事態に出会ってもそこから逃げ出さない責任感のある少年。
エ、どんな事態にも動じることのない度胸と勇気をもった少年。

三 次の文章を読み、後の問に答えなさい。（、　や。　や「　」も一字とします）

文章を書くことについて、素朴な「作文観」のようなものがあって、ぼくたちの文章の作り方を方向づけている。多くの子供たちが誤解していることの一つに、「文章はすでに頭の中に考えがあって、それを人にわかるような形で写しとったものだ」ということがあるように思う。つまり、書くということは、テーマを与えられたら頭の中のアイデアを文章に①翻訳する作業であるというイメージである。②これでは、まるで買い物のように、「優先席のテーマについてはどうですか」と言われて、「はい、ちょっとお待ちください」と言って出してくるようなものだ。だからこそ、少々難しいテーマになると、「書きたいことは別にありません」という品切れ中のような返事が来るのだろう。

正直なところ、ぼくも漠然とではあるが、子供のときはそんなイメージをもっていたのである。しかし、文章を書く経験を積むにつれて、書くという作業を通じて考えが生まれて、それをまた書いては自分で読んでいるうちに考えが進んでいくということに気がついてきた。決して初めに書くことが決まっているわけではなく、課題文に③触発されたり、連想メモや構成メモを作ったりすることを通して、考えがまとまってくるのだ。

④人は「考えたことを書く」のではなく、いわば、「考えるために書く」のである。書くということを通じてこそ、人は自分の考えを進めたり、新しい考えを出したりできる。逆に言うと、考えがまとまらないとか、進まないというときには、書いてみるのがいちばんなのである。しかし、それがわかっていながら、人はなかなか面倒くさがって書かない。だからこそ、書かなければならないという状況に自らの身をおいて、それを最大限に利用することをすすめたい。

実は、これは書くことだけに限ったことではない。一般に、「表現する」というのは、心の中にすでにあるものを外に表すことだととらえているようだが、実は、表現するという行為を通して心の中にあるものが変化していくのである。それは、自分でももやもやとしていた事柄が形を成してくるということもあるし、思いもかけなかったような新しいアイデアに思い至るということもある。作曲にしても、絵画にしても、研究発表にしても、その制作過程を通じて自分自身が〔　⑤　〕していくことを感じることができるし、それがまた表現することの⑥醍醐味なのである。

〔市川伸一「勉強法が変わる本」〕

問一　――①について、ここでの「翻訳」の意味としてもっともふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア、解体　イ、消化　ウ、変換（へんかん）　エ、組立

問二　――②について、この文の説明としてもっともふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア、出された課題とそれに対する答えの提出との間に迷（まよ）いが生じ、余計な時間がかかってしまうということ

イ、与えられた課題に対して、あらかじめ頭の中にある思考を文章にして提供することと変わらないということ

ウ、欲しいものと用意しているものとが常に対応しているので、瞬時（しゅんじ）に答えを見つけられるということ

エ、先に考えをまとめておかないと品切れになってしまうように、書くことのアイデアも浮ばないということ

問三　――③の意味としてもっともふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア、反発　イ、影響　ウ、強制　エ、誘惑（ゆうわく）

問四　――④について、この文の説明としてもっともふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア、人は考えがまとまったところで書き始めるのではなく、書いていくうちに次第に自分の考えがまとまっていくのである

イ、人は考えたことを書いているように見えて、実はそこに書かれた内容は未完成のものに過ぎないのである

ウ、人は自分がはじめに考えたことが正しいかどうかを確認するためにものを書き、そこから安心感を得るのである

エ、人は書いている間に自分の考えに迷いが生じ、最初に思いついた結論から次第にズレが生じていくのである

問五　〔　⑤　〕を補うのにふさわしい言葉を本文からぬき出しなさい。

問六　――⑥のことばの使い方としてもっともふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア、試験に合格して、中学校生活の醍醐味を手にすることができた。

イ、自分からあいさつすることで、人間関係の醍醐味がはじまる。

ウ、ラーメンのにおいを嗅いだだけでスープの醍醐味を理解できた。

エ、山と一体化した気分になれるところにスキーの醍醐味がある。

問七　次の中から、筆者の意見に沿った具体例を一つ選び、記号で答えなさい。

ア、日記をつけることで、自分が何を考えていたのかがわかるようになった。

イ、人の話を聞くときにメモを取る習慣をつけると、考えがまとまりやすい。

ウ、同じテーマで絵を描いたとしても、そこに描かれる形は人によって異なる。

エ、思いついたことを忘れないうちに書きとめておくことが財産になる。

三							二									一			
問七	問六	問五	問四	問三	問二	問一	問九	問八	問七	問六	問五	問四	問三	問二	問一	問二		問一	
									1						あ	6	1	6	1
									2						い	7	2	7	2
																8	3	8	3
																9	4	9	4
																10	5	10	5

受験番号

座席番号

名前

ADA

入学考査問題

国語・解答用紙

聖学院中学校

A B C D E F G 計

検